

アメリカの全エネルギー消費に占める中東石油の割合はわずか5%なのに、

なぜアメリカは対イラク戦争をしたのか？

～以下、書評「世界を動かす石油戦略（石井彰、藤和彦 著）」（藤森照信 評）＜毎日新聞（03.2.23）＞より～

注：・・・・・・は省略部分。太字は引用者が強調のためにそうしました。

・・・・・・5%。50%じゃなくてわずか5%。これがアメリカの全エネルギー消費に占める中東石油の割合。石油消費量だけみても、中東産は10%台。その5%も、サウジアラビアとの関係維持のためにしぶしぶ買っているだけで、正味2%が必要不可欠だろう・・・・・・。第二次石油ショック以後、・・・・・・事態は様変わりした・・・・・・。まず、石油資本なるもの、いわゆるメジャー（メジャーズが正しいらしい）は、・・・・・・中東湾岸の大産油国では、一九七〇年代から八〇年代にかけての『資源ナショナリズム』の興隆によって、石油権益のほとんどが国有化されてしまったため、米国系国際石油企業は追い出されて、現在ではほとんど何も資産を持っていないのである・・・・・・。アメリカは石油ショックにこりて中東以外からの石油調達に向かい、現在は先の数字に至っている。脱中東を可能にしたのは、イギリスとノルウェーによる北海油田や中南米の開発に成功したから。・・・・・・ではどうしてアメリカは、少し前、湾岸戦争を戦い、今また中東をわがうちに抑えこもうとしているのか。・・・・・・やっぱりことの本質は石油なんだけど、中東の石油が欲しいわけじゃなくて、**中東を一部として含む世界の石油市場の安定こそが目的。・・・・・・石油は典型的な国際商品であり、世界単一の史上を形成しているため、たとえ米国の中東依存度が小さくても、中東地域で一朝事があれば、国際石油市場は大混乱に陥り……米国の最大輸入元である中南米諸国やカナダの原油価格も、国際石油市場内の『玉突き』現象によって急騰し、米国の需要家・消費者は、日本や欧州の需要家・消費者とまったく同じ目に遭う**のである・・・・・・。石油は少し前までのように属地的産品ではなく、世界単一市場で右から左へと動く商品になっている・・・・・・。